

# 知識探訪

多民族社会の横顔を読む  
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

## 1964年の東京五輪とマレーシア

福島康博（立教大学アジア地域研究所特任研究員）

東京オリンピックの開催まであと1カ月に迫った。無事実施されれば東京では2回目の夏季五輪となるが、57年前の東京オリンピックにマレーシアはどのように臨んだのだろうか。当時の報道を中心に振り返ってみたい。

前回の東京大会は1964年に開催されたが、この年はマレーシアにとっては多難な年であった。前年の63年9月、マラヤ連邦にサバ、サラワク、シンガポールが加盟してマレーシアが誕生した。そのため「アジアでもっとも若い国」という触れ込みで東京大会に参加することになった。

ところが隣国インドネシアが、マレーシアの発足は英国の新たな植民地化政策だとして反発、フィリピンはサバの領有権を主張するなど、発足早々、周辺国との対立が生じた。国内に目を転じると、インドネシア人ゲリラによる戦闘が発生する一方、シンガポールでは華人とマレー人との対立が表面化した。

マラヤ連邦に加入した各地域の五輪事情を見てみると、まずシンガポールは、前回60年のイタリア・ローマ大会にシンガポール自治州として参加し、重量挙げで銀メダルを獲得した。東京大会ではマレーシアの一部として参加したが、次の68年メキシコ大会からは独立国シンガポールとして参加している。

サラワクは、単独での五輪参加の経験はなかったものの、62年にインドネシアで開催されたアジア大会などの国際大会では、英領サラワクとして出場したことがある。そしてサバは、前々回56年のオーストラリア・メルボルン大会に北ボルネオとして2人の陸上選手が出場したことが、唯一の五輪参加であった。

これらにマラヤ連邦を加えた4つの五輪委員会は、64年5月にマレーシア五輪委員会として統合され、後に首相となるラザク副首相が会長に就任した。

聖火リレーはマレーシアでも行われた。ギリシャで採火された聖火はユーラシア大陸を西から東へと横断したが、9月2日にタイからクアラルンプールへ空路で到着、市内で聖火リレーとともに記念行事などが催された。一夜明けた3日午前10時には、次の中継地点であるフィリピンへと同じく空路で渡った。

マレーシア選手団は62人を数えた。これは、現在に至るまで歴代最多を誇る。選手団が膨れ上がったのは、一つはホッケーや自転車のトラック種目といった団体競技に出場したこともあるが、もう一つは「あちらの州が選手を出すならうちの州からも」という声に配慮した結果だったようだ。選手団の中でも注目されたのが、シンガポール出身の女子水泳モリー・タイ選手で、当時小学6年生の12歳と、東京大会の全出場選手の中で最年少だった。

サバ州初代州首相のフアド・ステファンズ氏を団長とする選手団が選手村に入村した際、国旗をひときわ高く掲げたという。当時の報道によれば、新興独立国の国民が旗の下に結束しているのだと、日本人スタッフは感じ入ったという。

10月10日の開会式では、サラワク州の男子陸上クダ・ディッダ選手が旗手を務めた。大会期間中、マレーシア選手が泊まる宿舎の備品が燃えるぼや騒ぎが起きたものの、当の選手は富士山に観光旅行中で留守だったという不審な出来事もあったようだ。メダルには届かなかったものの、東京オリンピックへの参加は同国のスポーツ振興と国民統合に貢献した。



2010年のユース五輪開催を記念して作られたシンガポールのユース五輪公園（筆者提供）

その後であるが、マレーシアは92年スペイン・バルセロナ大会でのバドミントン男子ダブルスで、念願のメダル（銅）を初めて獲得した。他方、独立したシンガポールは、10代の若手選手を対象とするユース五輪の2010年第1回大会の開催国となった。

今大会、マレーシア選手団はどのような活躍を見せるのか、期待が高まってきた。

### < 筆者紹介 >

1973年東京生まれ。立教大学アジア地域研究所特任研究員。学術博士。マレーシア留学時代にクアラルンプール日本人会で始めた合気道は、今年で17年目。最近、地元体育館が新型コロナワクチンの集団接種会場になったため、稽古が当面の間はお休みに。運動不足が心配です。